

近世・近代日本におけるアイヌ史研究の課題

著者	米家(旧姓 山田) 志乃布
出版者	法政大学国際日本学研究所
雑誌名	国際日本学
巻	1
ページ	87-92
発行年	2003-10-31
URL	http://doi.org/10.15002/00022553

近世・近代日本におけるアイヌ史研究の課題

山田 志乃布

はじめに—記録史料とアイヌ研究—

日本におけるアイヌ研究は、考古学・民族学・言語学・歴史学・地理学など様々な分野で行われている。なかでも、国際日本学第1回シンポジウムにおける佐々木利和氏の報告にあるように、近年の研究動向としては、アイヌ語（言語学）やアイヌの物質文化（考古学・民族学など）についての研究は目覚ましい発展をとげており、多くの注目すべき成果が存在する。

そこで本稿では、言語学・考古学・民族学などの成果ではなく、文献史学および筆者の専門である歴史地理学の主要な論点を概観し、主に19世紀を対象としたアイヌ史研究について、記録史料を利用した研究に関して問題点を整理し、筆者なりのアイヌ史研究の課題について展望したい。

1. 文献史学におけるアイヌ史研究

多くの研究者が指摘するように、アイヌを主体とした歴史構築には、大きな困難が存在する。これは文献・記録のすべてが「和人」側のものであり、アイヌ自身の記録が存在しないことにある。このような制約から、従来の文献史学においては、アイヌ史そのものではなく、和人によるアイヌ支配のあり方、アイヌ政策史が主要な研究動向としてある。

戦前においては、日本におけるアイヌ民族の文献史学における研究は、通史的なものを除いては、あまり盛んでなかったといえる。彼らは狩猟採集を生業とする「未開」民族として位置づけられ、それゆえ、むしろ人類学者のほうが

はるかにアイヌに注目してきた⁽¹⁾。またアイヌ史研究というよりは、北海道や樺太の開拓・開発を推進する「植民学」の分野で、積極的に取り上げられてきた⁽²⁾。

一方、戦後の研究になると、近代日本が行ってきたアイヌの「同化」政策に対して批判的な研究が盛んになり、その視点からの研究が主流になってくる。

日本近世史においては、松前藩と江戸幕府によるアイヌ支配のあり方が、もっとも重要な検討課題となっている。特に、松前藩制下では、場所請負制における和人のアイヌ「収奪」の側面を検討する研究が行われ、また、和人・アイヌ関係を考察するうえで重要な出来事であるシャクシャインの戦い、クナシリ・メナシの戦いといった事件の詳細な検討も行われている⁽³⁾。

さらに注目される視点は、異域・異国としての四つの口（松前・対馬・長崎・薩摩）の議論から導き出される異民族支配の問題である。この視点に関連して、特に紹介すべき研究として、菊池勇夫は、幕藩制国家とアイヌ民族の関係のなかでも、近世後期において幕府がいかにアイヌ社会にくい込み、内国化を推し進めたのかを論じている⁽⁴⁾。また岩崎奈緒子は、クナシリ・メナシの戦いなどを詳細に再検討し、「松前藩によるアイヌ収奪」は「事実」というよりは「表象」であり、蝦夷地幕領化を推し進めるための政治的言説であると位置づけた⁽⁵⁾。

いずれにおいても、近年の研究では、幕藩制国家によるアイヌ支配の問題を解明する視点が中心であり、日本近世史研究の主たる関心といえよう。

明治期になると、アイヌ史研究は、明治政府による同化政策の検討が中心になってくる。アイヌの「日本人化」政策は、幕府領時代にも行われていたが、開拓使・北海道庁にも引き継がれ、明治32年（1899）の「北海道旧土人保護法」により徹底的な同化政策がとられていく。そして、それは「同化」という名の「異民族統治としての普遍的視角」であったという⁽⁶⁾。また、近年のアイヌ教育史の分野では、アイヌの「同化」は、実は同時に「排除」でもあったという指摘がなされており⁽⁷⁾、現在の研究潮流では、明治期以降のアイヌは、単に「同化」された民族である、というだけでなく、「劣悪民族」として徹底的に「差別」されていたとも位置づけられている⁽⁸⁾。

このような日本近代史の研究では、まさに、アイヌ支配の問題は、朝鮮半

島・中国などに展開していく近代日本の植民地政策につながる問題として捉えられていることに特徴があろう⁽⁹⁾。

2. 歴史地理学におけるアイヌ史研究

文献史学が、和人（幕藩制国家および明治国家）によるアイヌ支配といった政治史・政策史・制度史の研究を深める一方で、歴史地理学では、記録史料を用いた徹底的な「実態」分析にその特色が見られる。具体的には、アイヌの人々の集落形成や人口分布・人口移動など、可視化できる現象の解明、とも言い換えられよう。

近年の特筆されるべき研究は、遠藤匡俊による、近世後期におけるアイヌ社会の復元研究である⁽¹⁰⁾。遠藤は、幕末に作成された膨大な量のアイヌ人別帳を用いて、綿密な人口動態・人口移動の分析を行っている。また同時に、それらの史料を用いて、アイヌの人々のアイヌ名から和名への改名についても論じている。

その他、足利健亮による東蝦夷地のアイヌ集落の研究⁽¹¹⁾や片上広子による西蝦夷地石狩場所におけるアイヌ集落の移動にかかわる研究⁽¹²⁾などもある。

これらの諸研究は、いずれも、幕末蝦夷地の探検家として有名な松浦武四郎の地誌類を用いた集落復元の「実態」解明の研究である。

3. アイヌ史研究の課題

以上、日本近世史・日本近代史・歴史地理学におけるアイヌ史研究の動向を概観した。すべてに共通する問題点として、第一に、記録史料の限界性をどのように考えるか、が挙げられる。記録史料は、あくまで和人側の記録であり、その記録を用いた研究を行ううえでは、和人のアイヌ支配を中心に歴史構築せざるを得ない状況がある。第二に、以上のような記録史料の限界性をふまえたうえで、いかにアイヌ史の「実態」に近づくことができるのか、その方法の模索が必要であろう。

筆者は、以前に、さきほど挙げた幕末蝦夷地の探検家である松浦武四郎の作

成した『近世蝦夷人物誌』という記録を用いて、幕末蝦夷地におけるアイヌ女性の和人の記録にどのように記述され表現されているのか、を分析することから、その記録の作成者である松浦武四郎のアイヌ女性への「眼差し」を検討する、という論文を書いたことがある⁽¹³⁾。その際に考察したことを紹介しつつ、上記二点について、筆者の現段階での意見を述べてみたい。

松浦武四郎の記録は、その克明さが他の同時代の記録に比べて群を抜いていることから、幕末蝦夷地の「実態」を明らかにするうえで、もっとも有効な文字史料である。しかし、上記において指摘したように、蝦夷地においては、支配者側である和人の記録が中心であり、アイヌ側の記録が存在しないことに研究の限界がある。つまり、蝦夷地研究は、一方的な視点による記録を素材として、歴史構築しなければならない、という限界をつねに抱えており、つねに和人による文字資料をもとにすることは、蝦夷地におけるアイヌの「実態」や歴史的事実を解明するうえで、大きなマイナスと考えられよう。

しかし、このことは、裏を返せば、いかに和人が単なる武力だけでなく、文字という記録によってもアイヌを支配してきたのか、和人が書いた記録の存在そのものが同時代において、後世において、どのように北海道の植民地支配を推し進めるひとつの手段として機能してきたのか、ということをはっきりとすることにもつながると考えられる。

そこで、和人の記録史料を単に過去のある地域の実態や歴史的事実を明らかにするためのものでなく、作成側の「認識」として捉え直し、テキストそのものを丹念に分析し、その記述を再吟味する必要がでてくる。史料批判を、とりわけ慎重に丁寧に行う、とも言い換えられよう。そして、その際に、その記述も個人の素朴な認識ではなく、その記述によってある特定の地域像や歴史像が創出されていくことを考えることが重要である。つまり、その記録は、同時代の人々や後世の人々に多大なる影響を与えること、記録そのものが和人側の権力実践になっていくことを考慮していく必要がある。多くの写本が存在した史料、あるいは同時代や後世に出版された書物の記述については、改めて読み直し、再評価していく手続きが重要になってくる。今後は、これらの点を明確に踏まえたうえで、多くの様々な記録史料にもとづき、さらに近世・近代のア

イヌ史を再考していくことが必要である。

たとえば、筆者は、松浦武四郎の残した記録や多くの地図・書物を、客観的・中立的な立場で書かれたものとはみなしていない。当然、彼の「眼差し」や彼の思想を反映したものと考え、それを解釈していくことの必要性を感じている。筆者は、前稿では、松浦武四郎の『近世蝦夷人物誌』にでてくるアイヌ女性の記述の特徴が、ある一定の固定化したイメージのアイヌ女性ばかりであることを指摘した。

松浦武四郎は、幕府お雇いとして蝦夷地を調査するうちに、様々な階層の様々なアイヌ達に出会い、彼らを見つめ、彼らと話し、彼らのことを細かく記述したといえるが、女性に関しては、男性に比べて、一定の固定化した女性像に収斂していたように思われる。もちろん、アイヌ社会において、男性は女性に比べて、様々な階層に存在していたであろう。しかし、松浦武四郎の記述では、あくまでアイヌ女性は家族を守り、家族を支える存在として、ことさら強調して描かれているように思われる。そこで、松浦武四郎の視野にはいってこない、アイヌ女性とはどのような女性たちなのだろうか。これを明らかにしていくためには、同時代の他の記録史料との丹念な比較が重要になってくるであろう。

さらに、和人の支配者層である松浦武四郎が、心から共感を覚えて接していたのは、やはりアイヌ社会でも支配者層である「酋長」たちであり、彼らの英知や勇気をことさら評価していたと思われる。さらに、健気に家族を守る優しいアイヌ女性を、親身になって救う幕府役人や心優しき和人にも共感を覚えていたのではないだろうか。それゆえ、同じ和人とはいえ、場所請負制下でアイヌの人々を使役する番人・支配人などの非道ぶりに痛烈な批判を加えたことも考えられる。ここに松浦武四郎個人の政治意識を読み取ることができよう。そして、彼の著作に流れる思想は、そのまま、彼の著作を用いた歴史研究にも影響を及ぼすことになるだろう。

このように、記録史料そのものを丹念に再検討し、読み直すことで、新たな歴史像の提示も可能になってくる。そして、それをふまえたうえで、他の同時代の記録史料と比較することにより、さらに歴史的事実に近いことも夢ではない。

冒頭に述べたように、近年、言語学や物質文化の研究がすすみ、その方面からのアイヌ研究が盛んになっており、多くの研究成果がみられる。このようなアイヌ研究の成果を取り入れながら、膨大な和人の記録史料をさらに活用し、アイヌ史研究をさらに多角的にすすめていく必要性を筆者は感じている。そして、研究に用いる記録史料の性格やその記録の丹念な分析を行うためにも、単に誰が書いたどのような記録が存在するのか、だけでなく、その記録のそれぞれの写本・版本の特徴など、文献史料についての基礎的なデータベースの作成も今後の課題となってくると思われる。

-
- (1) 例えば、鳥居龍蔵『千島アイヌ』、吉川弘文館、1903年。
 - (2) 例えば、高倉新一郎著作集編集委員会編『高倉新一郎著作集』、北海道出版企画センター、1995～2000年。
 - (3) 松前町史編集室編『松前町史』、松前町、1974～1993年。北海道編『新北海道史』、北海道、1969～1981年。
 - (4) 菊池勇夫『幕藩体制と蝦夷地』、雄山閣出版、1984年。同『北方史のなかの近世日本』、校倉書房、1991年。同『アイヌ民族と日本人』、朝日新聞社、1994年。
 - (5) 岩崎奈緒子『日本近世のアイヌ社会』、校倉書房、1998年。
 - (6) 小熊英治『単一民族神話の起源』、新曜社、1995年。同『＜日本人＞の境界』、新曜社、1998年。
 - (7) 小川正人『近代アイヌ教育制度史研究』、北海道大学図書刊行会、1997年。
 - (8) 前掲注6。
 - (9) 大江志乃夫ほか編『岩波講座近代日本と植民地』第1巻、岩波書店、1992年。
 - (10) 遠藤匡俊『アイヌと狩猟採集社会』、大明堂、1997年。
 - (11) 足利健亮「東蝦夷地における和人と蝦夷の居住地移動」、人文地理20巻1号、1968年。
 - (12) 片上広子「松浦武四郎の調査記録による蝦夷地の地域構造の分析」、歴史地理学158号、1992年。同「近世における石狩地域の動態」、人文地理45巻6号、1993年。
 - (13) 山田志乃布「幕末蝦夷地におけるアイヌ女性」(大口勇次郎編『女性の社会史』、山川出版社) 2001年。